

参考文献

ディケンズの作品からの原文による引用はすべて The Oxford Illustrated Dickens 版による。

Bagehot, Walter. "Charles Dickens." *National Review* 7 (1858): 458–86. Rpt. in Hollington 167–92.

Baumgarten, Murray. "Calligraphy and Code: Writing in *Great Expectations*." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 61–72.

Carlton, William J. *Charles Dickens, Shorthand Writer*. 1926. Ed. Norman Page. London: Routledge, 1999. Vol. 3 of *Charles Dickens: Family History*. 5 vols. 1999.

Conrad, Peter. *The Victorian Treasure-House*. London: Collins, 1973.

Curtis, Gerard. *Visual Words: Art and the Material Book in Victorian England*. Aldershot: Ashgate, 2002.

Hollington, Michael, ed. *Charles Dickens: Critical Assessments*. Vol. 1. Mountfield: Helm Information, 1995.

Horne, R.H. "Charles Dickens." *A New Spirit of the Age*. Vol. 1. London, 1844. Rpt. in Hollington 94–101.

Hutter, Albert D. "Dismemberment and Articulation in *Our Mutual Friend*." *Dickens Studies Annual* 11 (1983): 135–75.

Kitton, F.G. *Dickens and His Illustrators*. London, 1899.

Kreilkamp, Ivan. "Speech on Paper: Charles Dickens, Victorian Phonography, and the Reform of Writing." *Literary Secretaries / Secretarial Culture*. Eds. Leah Price and Pamela Thurschwell. Aldershot: Ashgate, 2005. 13–31.

Miller, J. Hillis. "The Fiction of Realism: *Sketches by Boz*, *Oliver Twist*, and Cruikshank's Illustrations." *Dickens Centennial Essays*. Eds. Ada Nisbet and Blake Nevius. Berkeley: U of California P, 1971. 85–153.

Marcus, Steven. "Language into Structure: *Pickwick Revisited*." *Daedalus* 101 (1972): 183–202.

Orwell, George. "Charles Dickens." *Inside the Whale*. London, 1940. Rpt. in Hollington 717–55.

Paroissien, David. "Characterization." *Oxford Rearder's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. 1999. Oxford: Oxford UP, 2000.

Pykett, Lyn. *Charles Dickens*. Basingstoke: Palgrave, 2002.

Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. 1970. New York: Viking, 1972.

ツヴァイク, シュテファン. 『三人の巨匠』柴田翔他訳, みすず書房, 1961.

ディケンズ, チャールズ. 『ハード・タイムズ』山村元彦・竹村義和・田中孝信共訳, 英宝社, 2000.

フォースター, ジョン. 『チャールズ・ディケンズの生涯 上巻』宮崎孝一監訳, 研友社, 1985.

松村昌家. 『ディケンズの小説とその時代』研究社, 1989.

慈善活動家としてのディケンズ —ユーレイニア・コテージへの評価—

Dickens and Charity:

An Evaluation of Urania Cottage

武井 暁子

Akiko TAKEI

1. 始めに

チャールズ・ディケンズが、創作、雑誌出版、公開朗読など作家本来の活動のほか、慈善活動に精力的に取り組んできたことはよく知られている。なかでも、ディケンズと彼と公私にわたって親しい友人且つ慈善家であったアンジェラ・バーデット＝クーツ (Angela Georgiana Burdett-Coutts, 以下クーツと略記) が共同で行った売春婦更生のための施設、ユーレイニア・コテージ (Urania Cottage, 以下コテージと略記) の運営は、ディケンズが1847–57年までの長期にわたって継続的に専念した活動であり、彼の慈善活動家としての一面を知るために非常に重要である。Household Words (以下HWと略記) 刊行ほどワンマン運営ではなかったが、ディケンズは、既存施設の視察、専門家からの情報収集、場所探し、家主との契約、スタッフの採用、収容者の面接、手に負えない収容者の処分、建物の増築、メンテナンスなど、設立から軌道に乗るまで、コテージ運営を全面的に仕切った。ディケンズがコテージに関わっていた時期は壮年期で、作家としての全盛期と重なり、気力体力両面で充実していた時期であった。

売春はヴィクトリア朝のジェンダーと性規範を考える上で不可欠な問題で、ディケンズも複数の作品で取り上げている。にもかかわらず、ディケンズのコテージ運営は、これまでに、フィリップ・コリンズ (Philip Collins)、ノリス・ポープ (Norris Pope)、マイケル・スレイター (Michael Slater)、パメラ・ジェインズ (Pamela Janes) らの研究はあるものの、コテージの発案、運営の実務、収容者たちの生活、成果までを包括的に論じたものは少なく、その全貌は依然

わかりにくい。この論では、ディケンズからクーツに宛てた書簡、HWに掲載したエッセイを精査し、コテージの活動の全体像を明らかにした上で、評価したい。さらに、ディケンズのコテージ運営はフィクションにあまり影響をあたえていない、とよくいわれるが、経営管理者ディケンズと作家ディケンズの乖離についても考察したい。

2. クーツの略歴

論を始めるにあたって、クーツの経歴を簡単に紹介し、ディケンズとクーツの交友の実態を明らかにしたい。クーツはディケンズより2歳年下で、1814年4月24日に生まれた。父フランシス（Sir Francis Burdett）はウィリアム・ピット（William Pitt the Younger）と対立したことで知られる革新派の政治家であった。母方の祖父トマス・クーツ（Thomas Coutts）はエディンバラの銀行家一族出身で、父の銀行の支店をロンドン、ストランド59番地に開設し、‘Coutts and Co.’の母体を作り、財を築いた。ディケンズはクーツ銀行に口座を持っていた。

1837年、クーツ23歳のとき、祖父トマスの莫大な財産を相続し、「イングランドで最も裕福な女相続人」として、あまねく知られるようになった。財産相続の条件に、クーツ姓を名乗ることがあり、以来バーデット＝クーツを名乗る。クーツは、絵画のコレクターとして知られ、大規模なパーティを催し、ウィリアム・グラッドストーン（William Gladstone）、ベンジャミン・ディズレイリ



Angela Georgiana Burdett-Coutts (1814–1906)

（Benjamin Disraeli）らと親交があった。彼女には求婚がひきも切らなかったが、長いあいだ結婚しなかった。コテージ設立時には、クーツはナポレオン戦争の英雄で45才年上のウェリントン公（the Duke of Wellington）と恋愛関係にあった。彼女のウェリントン公への求婚は断られたが、二人の関係はウェリントン公が1852年に死ぬまで続いた。1871年、クーツ67歳のとき、37才年下の秘書ウィリアム・アシュミード・バーレット（William Ashmead Barlett）と結婚し、ヴィクトリア女王をして「狂気の沙汰」と言わせしめた。

このように、クーツの私生活は華やかだったが、彼女は敬虔であり、財産の大部分は、慈善事業と寄付に費やされた。クーツの事業には、コテージ設立のほかに、ロンドンの貧困地区スピタルフィールズに女性のための裁縫学校設立、やはり貧困地区のノヴァ・スコシャ・ガーデンズに低所得層向けの共同住宅建設、禁酒協会（The Temperance Society）、国立子供虐待防止協会（The National Society of the Prevention of Cruelty to Children）、王立動物虐待防止協会（The Royal Society of the Prevention of Cruelty to Animals）の設立がある。クーツの活動はイギリス国外にもおよび、オーストラリア先住民族アボリジニーへの支援、トルコ＝ロシア戦争のトルコ人難民への援助、さらに、フロレンス・ナイティンゲール（Florence Nightingale）らと提携して看護活動への支援などを行なった。これらの功績により、1871年、クーツはバロネスに叙せられた。ベスナル・グリーンに残る‘Baroness Road’という地名は彼女のバロネス叙勲に由来する。

3. ディケンズとクーツの出会い

ディケンズとクーツとの初対面は、文献によって1835–40年と異同がある²。この間、1836年にディケンズは新聞記者をやめ、作家に専念することを決意、結婚、1837年にクーツが財産相続して、双方にとって人生の節目になる出来事が起こるので、二人の出会いが人生の節目の前と後では、意味合いが違って来る。本論では、ディケンズからクーツ宛の書簡選集編者エドガー・ジョンソン（Edgar Johnson）の1835年説を採用する。ジョンソンによれば、ディケンズとクーツの出会いの仕掛け人はクーツの祖父トマスの共同経営者エドワード・マーチバンクス（Edward Marjoribanks）で、二人をディナーに招待した。このとき、ディケンズは23歳で、新聞記者の傍ら、*Monthly Magazine*, *Bells Life in London*, *Evening Chronicle*などに短編を発表していた。クーツは財産相続前であった。マーチバンクスがディケンズを自分の銀行の創立者の孫娘に引き合わせた意図は不明だが、ディケンズはこの日の出会いに運命的なものを感じていたようだ。ディケンズとマーチバンクスとの交友はディケンズが名を成してからも続き、1857年1月14日付の手紙で、ディケンズは、マーチバンクス

が『凍れる海』(The Frozen Deep) の上演を楽しんだと聞いてうれしい、と書いている。³

ディケンズの直感を裏付けるかのように、ディケンズとクーツとの親交は公私にわたり長く続いた。コテージ運営に加え、ディケンズはクーツのために、ひっきりなしに来る寄付の依頼を吟味、取捨選択し、慈善活動に関して助言をあたえ、プランを練るなど、秘書兼アドバイザーとして無償で働いた。クーツはディケンズに報いるために、彼の長男チャーリーのイートン校での学費を支払い、次男ウォルターに陸軍士官候補生のポストを提供した。ディケンズはクーツ宛にチャーリーとウォルターの学業成果や人生設計について頻繁に手紙を書き、『マーティン・チャズルウィット』を献呈し、他の小説の執筆状況も書いている。ディケンズが妻キャサリンと別居したことをきっかけに、二人の親交は終わったというのが定説になっているが、これは半分正しく半分間違っている。確かに、別居以降ディケンズがクーツの慈善活動に関わることはなく、キャサリンとの関係を修復しようとのクーツの申し出をディケンズは頑として受け付けなかった。しかし、頻度は少なくなったが、クーツのコンパニオン、ブラウン夫人 (Mrs Brown) を通して、ディケンズは親愛と敬意をこめた手紙をクーツに書いた。

4. ディケンズとクーツの最初の共同慈善事業

ディケンズとクーツの慈善活動での最初の提携は、1843年9月14日夜、クーツの依頼で、ディケンズがロンドン最下層地区の一つホーボン (『オリヴァー・トウィスト』のフェイギン (Fagin) の巣窟がある)、サフロン・ヒル所在、フィールド・レイン貧民学校 (Field Lane Ragged School) を視察したことから始まる。⁴ 2日後の9月16日、クーツに書いた報告は、「ひどい光景でした。オリヴァー・トウィストを引き合いに出すのは恥ずかしいのですが、まさに、あのユダヤ人 [フェイギン] が住んでいそうな場所でした」と始まり、住環境が劣悪で、70人近くいる子供たちが不潔で、衣類が粗末なことを指摘し、教師たちの熱意は評価するが、愛情や親切を知らない子供に、神の存在を教え込むだけでも困難である、と説く。そして、子供たちのほとんどは文字を読めないため、教師は善悪の区別から教えるのだが、彼らは昼間物売り、物乞い、窃盗をして疲れきった状態で学校にやってくるので、物事を覚えるのが非常に遅い、子供たちが来るだけでもたいしたものだ、と述べる。ディケンズは、子供たちが長男チャーリーと同年代ということもあって、あまりの惨状に大変ショックを受けたようだ。学校は、教師たちの手弁当で運営されているため、非常に貧しく、せめてもっとよい部屋と洗濯設備があればよいが、果たしてこの努力が続くかはわか

らず、子供たちが改善されるのは不可能ではないのか、しかし、クーツの慈善を受けるにはふさわしい試み (experiment) であるから、必要ならまた訪問すると結ばれている ('experiment' という語は、ディケンズからクーツ宛の手紙でたびたび使われた)。後年、ディケンズはコテージへの収容者を募るため貧民学校を訪れたが、貧民学校出身者はあまりにも惨めで救いようがないと思ったらしい。

このとき、ディケンズの不屈の意志を物語るエピソードがある。子供たちは、ディケンズが白いズボンと明るい色の靴を身につけているのを見て、大笑いした。同行者のスタンフィールド氏 (Mr Stanfield) は、あまりの悪臭に耐えかねてすぐ退去してしまい、ディケンズは好意的とはいいいかねる子供たちの中で、孤軍奮闘だったが、踏みとどまり、子供たちに質問をして答えさせた。子供たちは、ディケンズが彼らの返答に興味を持っているのがわかると、行儀良くなった。ディケンズは、少年の一人は「賢くて見事な答えをした」と書いている。

この報告には、貧困層の道徳と品位向上のためには、まず衣食住の保証が肝要であり、精神論だけを強要しても無意味である、生活環境を整えば彼らの精神面が向上する可能性はある、個人の善意に頼った支援には限界がある、などの主張がみられ、監獄、精神病院の改善、公衆衛生などへのディケンズの考えと共通する。以降、ディケンズはこの学校を数回訪問し、1852年3月13日、HWに“A Sleep to Startle Us”というタイトルで寮の視察結果を書いた。⁵ このとき、学校は職業訓練校になっていて、ホーボンよりはましなファリンドン・ストリートに移転していた。寮には、換気装置や水道が設置されるなどの改善はあったが、食事は量が少なく、滞在者が167人もいて過密状態だった。ディケンズは、政府が無能なことを批判し、財政援助により、ちゃんとした訓練と教育をすれば訓練生は有能な労働者になると主張した。

5. コテージの発案と設立

貧民学校から始まったディケンズとクーツの慈善事業は、コテージで、長期スパンの本格的な形で行われることになった。クーツが売春婦の救済と更生を思いついたのは、1. ピカディリーにある彼女の邸宅の玄関前で商売をする女性たちを見て大いに同情した、2. 尊敬する父親に私生児がいたことにショックを受けた、の理由からであった。

売春婦のための施設設立のアイディアは、1846年5月26日付のディケンズからクーツ宛の手紙に最初に登場する。施設の最終目標は、更生した女性を植民地に移住させ、現地在住のイギリス人男性と結婚させることだった。エドナ・ヒーリー (Edna Healey) によると、クーツは、売春婦更生と結婚をセットにす

る発想をそもそも理解できなかったが、ディケンズは、収容者に悔悟と再教育の褒美として結婚をあたえるべきだと力説して、クーツを説得した。⁶ クーツの考えは、莫大な財産を持ち、結婚にはいたらなかったものの、ウェリントン公と恋愛関係にある、物心両方に恵まれた独身女性ならではの発想といえようが、庶民感情を全く理解しないものだ。このことをはじめとして、ディケンズはクーツとの共同事業を通して、世間知らずのクーツに巷の実情を知らせ、プラクティカルな発想をさせるように心を砕いていたが、クーツがディケンズのアイデアを採用しないこともあった。

手紙は、具体的且つ時間と資金を有効活用するアイデア満載で、結局このとき書かれたプランがほとんど実行された。クーツは施設の新築を考えたらしいのだが、ディケンズは時間と経費の節約のため、ロンドン市内もしくは近郊の家の改築を提案した。収容者は、ロンドン市内の刑務所所長が、受刑者の中から、面接と本人の意志確認を経て選び、刑期終了後、ただちにコテージに収容する。収容者を探す手間が省けるし、刑務所を出てから再度悪の道に陥るのを防ぐことができ、一石二鳥である。コテージに入所後、収容者は、まず保護観察を受け、その後、本格的な更生にむけて訓練と教育を受ける。そして、刑務所管理のエキスパートでありノーフォーク・アイランド刑務所所長を務めたアレクサンダー・マコノキー (Alexander Maconochie) 考案のマーク・システムを応用し、収容者の行動にポイントをつける (後で詳しく説明する)。ちなみにクーツはマーク・システムには反対だった。女性たちは、コテージで秩序、時間厳守、清潔の習慣を身につけ、洗濯、裁縫、炊事などの家事を学ぶ。

コテージの教育方針は、親切と寛容によって、女性たちの自尊心や自制心を回復することだった。懲罰、威圧、彼女たちの人格と素行を非難することは当然厳禁である。入所時に、女性は、あなたは墮落して道を踏み外したが、このシェルターがあることによって、まだ可能性は失われていない、幸福を再び得る手段はあなたの手の中にあり、あなた自身の行いにかかっている、との説明を受ける。社会復帰が認められるには、彼女は自制心、真摯さ、周囲の信頼に答えるために努力する決意があることを証明しなければならない。自己努力と他人に評価されたい願望に働きかけて、中流階級の規範から外れた人間を、中流階級のスタンダードに基づいて再教育し、社会復帰させることは、ヴィクトリア朝中期に精神病患者を治療するのに使われたモラル・トリートメント (moral treatment) と同じである。⁷ コテージの場合、保護観察の期間をポイントによって決定する、累計ポイントは、1,000ポイントあたり6シリング6ペンスに換算し、再教育修了者に、再出発の資金としてあたえるなど、非常にわかりやすい形でよい行いが褒章に結びついている。

コテージの生活とモラル・トリートメントのもう一つの類似点は、贅沢三昧ではないものの、衣食住をよくし、女性たちに抑圧と不自由をあたえないようにしたことである。ディケンズは、自らトタナム・コート・ロードの卸売店シュールブレッズ (Shoolbread's) に服と生地を買いに行き、手ごろな値段で、きちんとし、しかも明るく見えるように仕立てさせた。このとき、4種類の色パターンを買い、収容者が同じ服装で外出して、近所の目を引かないようにと、細かいところまで気をつかった。クーツは女性たちの服装を明るい色彩のものにすることは非行につながると考えたが、ディケンズは、教育の最終段階ではすべての誘惑から遠ざけられるべきではない、と主張した。⁸ 衣服が人間の心理状態に影響することを熟知していた点で、ディケンズに分がある。部屋は相部屋だったが、ベッドは個別で、女性たちは喜んだ。施設の名前は、既存施設のように 'penitent', 'reformatory' などの、明らかに素行不良者の更生施設だとわかる名前ではなく、天体の名前をつけて、コテージは収容者の家 (home) であると言った。ここにも、中流階級の家と同じ環境で女性たちを更生させようとの意図がみられる。そして、衛生面の配慮も抜かりがなかった。コテージの排水設備が汚水層に直結していて、1850年9月と1857年2月にディケンズは工事を依頼した。1853年、コテージは増築され、1857年にガスが引かれた。

物質面だけではなく、コテージの雰囲気作りにもディケンズの注意は及んだ。家庭的な雰囲気を重視したのは前に述べたとおりである。彼がもっとも気を使ったのは、コテージの雰囲気が明るく希望に満ちた感じになるように、別の言い方をすれば、既存施設のように、悔悟を強要して、陰鬱で堅苦しい雰囲気にならないようにという点だった。そのため、ディケンズは、女性たちと牧師の個別面談は行わないことに決め、彼女たちにあたえる読み物は説教がましいものは避けた。彼は中古ではあったがピアノを買い、女性たちは花壇で花を育てることができた。この類の施設にピアノを置くのはまれなことで、後に驚嘆された。ディケンズの運営教育システムを、例えばシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェイン・エア』(Jane Eyre; 1847) に登場するローウッド・スクール (Lowood School) と比べると、いかに進んでいるかわかる。

6. コテージの生活

1年半の準備期間を経て、1847年11月、コテージはロンドン西部、シェファーズ・ブッシュ1817番地で開所した (地図1, 2の矢印の場所)。この場所を選んだのは、郊外で税金が安く、人目につかず、誘惑が少ないからであろう。ジェインズはコテージの1ヶ月あたりの経費は41-43ポンドと推定する。⁹ 1861年出版のビートン夫人 (Mrs Beeton) の家政読本によると、住み込み家政婦の



地図1

年収が20-45ポンドだった。¹⁰ コテージの年間経費を定員いっぱいの15人で割ると34ポンドで、家賃、光熱費、食費を差し引くと、家政婦の最低ラインより少し上の年収ほどの年間経費だろうか。コテージは、少なくとも安かろう悪かろうのひどい待遇ではなく、女性たちの暮らしはまずまず快適だった。賃貸契約の際、ディケンズは物件を施設に改装すると言ったが、施設の趣旨や収容者の身分については詳細を明かさなかった。以降、施設のプライバシーを守る努力は続けられた。

コテージは、監督者2人と収容者13人が住むのに十分な広さがあり、保護観察用と本期間用のスペースに分かれていた。初期のころは、収容者の大半はコールドバス・フィールズ刑務所やトットヒル・フィールズ・ブライドウェル刑務所の受刑者の中から、所長が本人の意志を確認して選んだ女性だった。1853年4月23日に、ディケンズがHWに掲載したエッセイ“Home for Homeless Women”（以下Home forと略記）は、コテージ開所から5年半経過し、軌道にのってから書かれたもので、成功例を数件紹介している。¹¹ この時点で、収容者累計56人のうち、30人がコテージでの生活を全うし、オーストラリアをはじめとする植民地へ移住（内7人が結婚）、10人が素行不良により強制退去、7人が保護観察中に自主退去、7人が逃亡、3人が移住途中再び元の生業に戻った。半分が更生したので、まずまずの成果である。ヒーラーによれば、ディケンズはコテージの成果について過大な期待や幻想は持っていなかったため、こ

の結果にまずまず満足していた。¹² 成功例の滞在期間は最短7ヶ月、最長18ヶ月とかなりの幅があるが、おおむね1年だった。コテージの運営は1847-62年までの15年間で、収容者のトータルは150人であった。脱落者を勘定に入れても、常時10人の収容者がいた。

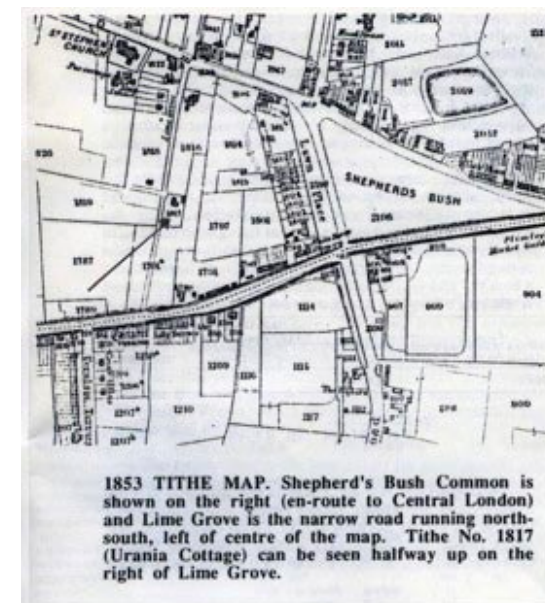
Home forによると収容者たちの平日のスケジュールは下記のとおりである。

6:00	起床
7:45	礼拝 朝食
10:30-12:30	学習
13:00	昼食
	針仕事、運動など
18:00	ティータイム
	夕食
20:30	礼拝
21:00	就寝

土曜：大掃除、衣類支給、入浴

日曜：午前は教会、午後は監督者と宗教の勉強

このスケジュールの特徴は、早寝早起きであることと、時間配分に比較的余裕があることだ。早寝早起きは収容者に規則正しさ、秩序、時間厳守を身につけさせるために不可欠だった。学習とは読み書き算術であった。女性たちは、1週間交代で掃除、食器洗い、炊事、針仕事を分担して行い、1日おきに洗濯日が設けられた。パンは自家製だった。ディケンズは「備え付けのオープンがあるのだから、パンを買うことは認めない」と書いている（1850.4.14）。経費節減のためでもあったろう。将来主婦として家庭を切り盛りする上で必要なことを最重視した教育内容である。



地図2

既に述べたとおり、収容者の行動管理のため、マコノキー考案のマーク・システムが採用された。これは、もともと受刑者管理が目的だったが、ディケンズは、コテージの女性たちが覚えやすいように、マコノキーのシステムを簡略化した。¹³ コテージでは、行動の判断基準が、正直、勤勉、気質、慎みある行動と会話、秩序、時間厳守、節約、清潔、節制（中庸、辛抱、穏やかさなど）の9つに分かれ、それぞれの項目で0-4点までのポイントがついた。不適格な行為は他の女性にもわかるように赤字で失格マークがつき、40点マイナスになった。ポイント化することによって、善行がわかりやすい形で高い評価につながり、しかもポイントが金銭に換算されるため、女性たちはこのシステムを重視した。これは、懲罰や威嚇ではなく、自己努力と他人に評価されたい願望に働きかけて、理性や道徳心の回復を促すモラル・トリートメントの巧みな応用である。

ちなみに、マコノキーのシステムでは、快適さを辛抱した受刑者に追加ポイントをあたえたが、ディケンズは「自発的な自己否定」は判断基準から除外した。自己否定といっても、極端なものではなく、洗濯の後ビールを飲まない、お茶や砂糖をとらないという程度のものであった。この項目を除外した理由について、ディケンズは、マーク・システムをよく理解する前に女性たちに不満と不信を抱かせる恐れがあるから、と述べた(1848.4.29)。飲食を我慢させるのは懲罰にほかならず、反抗心をあおるばかりで得策ではない、との明察である。

以上の事例であきらかなように、既存の刑務所や感化院に比べて、コテージの収容者管理はゆるやかで、情操面への配慮もあった。しかし、一方で、女性たちが放縦にならないような措置が次のとおり講じられた。日曜に教会に行くときは必ず監督者が同行した。両親との面会は月に1度、他の親戚や友人は3ヶ月に1度許可されていたが、監督者が立ち会い、会話の一部始終を聞いた。ディケンズは「女性たちと友達はあまりしゃべることがなく、感情を表わすことはめったにない。彼女たちは面会が終わるとむしろほっとした感じである」と書いている。¹⁴ もっとも、頼りになる肉親や友人がいれば、非行に陥ることはないのだから、こういう機会はそれほど多くはなかっただろう。知人に手紙を書くのは、運営委員会の許可を得て月1回認められたが、コテージからの手紙はすべて監督者が目を通してから投函された。女性たちへの手紙は、監督者の前で本人が開封して読み上げた。門は常に施錠され、女性たちが副監督者の監視下で、交代で門番を務めた。この仕事は彼女たちにとって誇りであったようだ。10分以上姿勢が見えない女性は搜索対象になった。先に述べたように、女性たちはベッドを個別にあたえられたが、秘密にものを隠すことがないように、ベッドメイキングは他人が行った。このように、ディケンズは監督者の監

視に加えて、収容者間の相互監視を取り入れることによって、女性たちを効率的に管理した。ミシェル・フーコー(Michel Foucault)が『監獄の誕生』(*The Birth of Prison*; 1977)において、監督者の恒常的監視により、ごく平凡な空間が懲罰的空間になりうることを論じたことはよく知られているが、¹⁵ ディケンズは、100年以上前にフーコーの理論をより高度な形で実践した。コテージは、人道主義に基づいて設立され、収容者を寛大に扱っているように見えながら、その実、ディケンズ自身の言葉を借りれば、「収容者間で親愛の情が育つことはめったにない」ほどの、¹⁶ 緊張を強いられる懲罰的空間でもあった。

7. 女性たちとの戦い

ディケンズが取り入れた居住条件の整備、自己努力の重視、相互監視は、ヴィクトリア朝中期では非常に斬新な行動矯正システムであったが、理論通りに行かないのが世のならいである。コテージには、HWで報告されたような成功例と同数の失敗例もあった。ディケンズは1846年5月にコテージのプランを考えてから、1855年11月にHWの副編集長ウィリアム・ヘンリー・ウィルズ(William Henry Wills)をクーツの秘書に推薦して、コテージ運営のかなりの部分をウィルズに任せるまで、実にまめにクーツに手紙を書いて、経費や収容者たちの様子を報告した。手紙で、実名を挙げられている女性は、たいてい問題を起こして退去処分を受けた女性ばかりである。HWのどちらかという冷静で淡々とした報告を編集済みの録画とすれば、クーツへの手紙は、ディケンズには気の毒なようだが、手に負えない収容者相手に奮闘するディケンズの声や表情が生中継で伝わってくるようだ。ここで、失敗例を紹介したい。

イザベラ・ゴードン(Isabella Gordon)は1849年にトットヒル刑務所から入所した。同年2月10日にスタッフがゴードンの過去を尋問し、おそらく口論になったのだろう。収容者の前科を詮索することは禁止事項で、このスタッフは解雇された。5月16日に、ゴードンは他の収容者と口論し、8月12日に退去が決まりかけたが、このときは猶予された。だが、11月6日に他2名と共に共謀して監督者に反抗を企てたため、退去が決定した。退去を言い渡されると、ゴードンは2階に上がってダンスの真似をして、服のすそをつまんでお辞儀をするという不敵な態度を取った。しかし、コテージを出るときは、挑戦的な態度はどこへやら、彼女は泣き、うなだれていた。このときの様子をディケンズは次のようにクーツに書いた。

The girl herself, now that it had really come to this, cried, and hung down her head, and when she got out at the door, stopped and leaned against the

house for a minute or two before she went to the gate — in a most miserable and wretched state. As it was impossible to relent, with any hope of doing good, we could not do so. We passed her in the lane, afterwards, going slowly away, and wiping her face with her shawl. A more forlorn and hopeless thing altogether, I never saw. (1849.11.6)

監督者と他の女性たちは、以前口論した者もふくめて、泣きながらゴードンのために許しを請うたが、処分が取り消されることはなかった。Home for に、「退去を脅し的手段として使うことはない」と書かれているとおり¹⁷、強制退去は本当に最終手段であり、本人がどんなに泣き喚こうが、覆ることは絶対なかった。懲罰や威嚇に頼らないことは、違反行為への例外なき厳格な処分と表裏一体のものだった。

ゴードンが退去後どうなったかは不明だが、彼女の追放の場面は『デイヴィッド・コパフィールド』第22章でマーサ・エンデル (Martha Endell) が故郷での白眼視に耐えかねてロンドンへ逃避を決意する場面のモデルになったとされている。ここでのマーサの様子は次のように書かれている (イラスト参照)。



『デイヴィッド・コパフィールド』第22章
マーサ出奔直前の場面

Then Martha arose, and gathering her shawl about her, covering her face with it, and weeping aloud, went slowly to the door. She stopped a moment before going out, as if she would have uttered something or turned back; but no word passed her lips. Making the same low, dreary, wretched moaning in her shawl, she went away.¹⁸

DC分冊では、22–24章は1849年12月刊行の第8号に掲載されたので、ディケンズが大いに感銘を受けたゴードン退去の場面を早速小説に活用したことは確かである。ピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) が指摘するように¹⁹、コテージにいるときもディケンズは小説家の目を持ち続けた。

女性たちの行動は一見今のわれわれとは縁遠いものに見える。ところが、意外なことに、よく吟味すると、現代の青少年の行動とかなり似た点がある。ゴードンの例でわかるように、素行不良者は、単独ではなく、徒党を組んでトラブルを起こすのが常だった。例えば、1854年に入所したフランセス・克蘭ストーン (Frances Cranstone) は、仲間を扇動するが、自分は決して尻尾を捕まえられず、ゴードンよりも一枚上手だった。同年4月16日付のディケンズからクーツ宛の手紙に、克蘭ストーンのやりたい放題にまともな収容者から苦情が出ている、新入りは克蘭ストーンの真似をする必要に迫られている、コテージの雰囲気は悪くなるばかりで監督者が手を焼いている、と書かれている。このような状況で、ディケンズは即座に克蘭ストーンの退去を決定した。ゴードンはコテージを出るとき意気消沈していたが、次の引用のとおり、克蘭ストーンは最後まで他の女性と大喧嘩をして、すごんだ。

Soon after I left, Cranstone broke out against Louisa Cooper with that violence, that Louisa Cooper (half frightened to death) entreated to be locked up for safety, which was done, Cranstone then demanding to go straightway, and Mrs Marchmont not knowing whether she ought to let her, Cranstone made proclamation to the establishment that she intended in the meanwhile “to be a Devil.” Upon which Mrs. Marchmont locked her up in another room. (1854.4.16)

克蘭ストーン追放後、取り巻きは後を追って自主退去した (この例が示すように、リーダー格が追放されると取り巻きはたいてい自主退去した)。自主退去の申し出があった場合、24時間の猶予をあたえ、本人に熟慮させる規則であったが、このとき、ディケンズは即座に退去を言い渡した。克蘭ストーン一派を一掃するためである。

ゴードンをはじめとして、コテージを退去させられた収容者がその後どうなったかは、たいてい不明だった。しかし、克蘭ストーンの場合、ディケンズはウィルズを通して、消息を把握していた。彼女はホワイトチャペルの下宿屋に住む男性のところへ、家政婦として働き、小さな子供3人の世話をしていた。コテージにいた頃と違って、ちゃんと働いていたが、洗濯は下手で、雇い主の

新しい妻か姉妹らしき女性と折り合いが悪かった。適当な口実を使って家を抜け出す、ウィルズとの面会をすっぽかすなど、克蘭ストーンのトラブルメーカーぶりは相変わらずであった。

この他、ゴードンの取り巻きで自主退去したハナ・マイアーズ (Hannah Myers) が、5ヶ月後の1850年4月、重罪で12ヶ月の刑を言い渡され、トットヒル刑務所で服役、さらに1854年1月、ディケンズと彼女が同所で再会した話、ディケンズいわく「非常に悪質で偽善的」(1850.4.17) なジェマイマ・ヒスコック (Jemima Hiscock) ともう1名がコテージのビール貯蔵庫をナイフでこじ開け、侵入し、泥酔する話などがあり、短編集ができそうなほどだが、ディケンズの名誉のために、成功例を紹介したい。ルイザ・クーパー (Louisa Cooper) は克蘭ストーンと同時期にコテージにいた女性で、実名が出てくる女性の中では、珍しいくらい物静かで素行がよい。そのため、先の引用でもわかるように、克蘭ストーンたちの標的になったが、コテージでの再教育を全うし、南アフリカに移住した。彼女が移住前にクーツに宛てた手紙には、クーツへの敬意と感謝が繰り返され、コテージで楽しい時間を過ごした、と訥々と書かれている。

As I am about to leave England I am most anxious that one of my last acts should be to thank you my kind Benefactress for all your goodness to me I cannot find words to express my gratitude but with the help of that kind Providence who will never leave me nor forsake me if I pray to him I will by my future life try to prove it I often think of your kind and gentle words and the thoughts of them has many times been a comfort to me and will be when I am in a far distant land we do not sail till the 10th of November Mrs Boyle goes to Plymouth a week before may every blessing be yours Dear and Honnored Lady and may all the young people at the Home prove deserving your bounty it is a comfort to know there is one placed over them who cares so much about them I can never forget how much I dreaded her coming or how soon I learned to love and respect her she has been so very kind in writing to me and given me good advice I often think of Urania Cottage and the many happy hours I have spent there I have taken the liberty to write to Mr Tennant to thank him for all his kindness to me with your permission I will take the liberty of writing on my arrival at the Cape may every blessing be yours' Honnored Madam is the prayer of your Humble Servant (1854.10.20, Cooper to Burdett-Coutts, ピリオド脱落等原文のまま)

クーパーは移住してから2年後の1856年11月、イギリスに帰国して、コテージを訪ね、ディケンズと再会した。このとき、彼女は、身なりがよく、すっかり落ち着いた感じになっており、ディケンズへの土産にぎよっとするようなダチョウの卵細工を持参した、という、ほっとする後日談がある。ディケンズは、素行がよい女性たちのことは“All was going on well”など、ごく簡単にしか書かないのだが、クーパーの更生と再出発は、克蘭ストーンに手こずったこともあって、よほどうれしかったのであろう。

このように、ディケンズが実生活で会った売春婦たちを検証すると、文学作品に登場する、田舎の純朴な女性が地主の息子に誘惑されて捨てられたあげく私生児を出産して、故郷を追われてロンドンに出て売春婦になり、最後はテムズ川に身投げする、というステレオタイプが、いかに現実とかけ離れたものであったかがわかる。ディケンズのクーツ宛の手紙に登場する売春婦たちは、反抗的で、徒党を組んで騒動を起こすほどの計画性と行動力があり、コテージを退去させられてからも犯罪を重ねるなど、いろいろな女性がいた。彼女たちは罪の意識が希薄であるから、悔い改めることはないし、深い考えもなく悪事を繰り返す。挑戦的で放縦なエネルギーすら感じさせる彼女たちが、世をはかなんで身投げするとはおよそ考えられない。このタイプの女性について、ディケンズは「他の女性たちの場所を奪っている」と怒りをこめて書く(1854.1.4)。

一方、ディケンズ作品の‘fallen women’は、前非を悔いて更生を願う、稼業を続けているが世間の白い目に打ちひしがれている、のいずれかである。²⁰ コテージの素行不良者のような、攻撃的もしくは罪悪感がなくあっけらかんとしている女性はディケンズの小説には登場しない。コテージにいた女性とディケンズがコテージ運営に携わっていた1847-57年に出版されたフィクションに登場する‘fallen women’が似ている点は、ゴードン退去とマーサ出奔のときに双方がすすり泣いて、ショールで涙をふく、マーサとエムリー (Little Em'ly) がオーストラリアで更生する (マーサは結婚)、クーパーとエムリーが、身を落としたのが不思議なくらいおとなしくて行儀がよい、くらいだ。『ドンビー父子』のアリス・マウッド (Alice Marwood) の病死、『荒涼館』のレイディ・デッドロック (Lady Dedlock) の自殺は、‘fallen women’は死をもって罪を償うべしというヴィクトリア朝文学の公式通りである。『リトル・ドリット』に登場する名無しの売春婦は打ちひしがれており、反抗的、あっけらかんとは程遠い。このように、ディケンズの小説では、‘fallen women’はステレオタイプの中でも非常に限られた役割しかあたえられなかった。ディケンズが、ゴードン退去を早速マーサ出奔の場面にアレンジしたことから考えても、彼はコテージの女性たちに文学的素材になりうる要素を見出していたと思われる。また、ディケン

ズが彼女たちとの関わりを創作活動において生かす技量がなかったとは考えにくい。にもかかわらず、ディケンズは読者の反応を気にするあまり、売春婦たちを一面的にしか書けなかった。リスpekタビリティを重視するヴィクトリア朝中流階級の読者マーケットは、ファニー・ヒル (Fanny Hill)、エミール・ゾラ (Émile Zola) のナナ (Nana) のようなヒロインを受け入れるには、あまりにも狭量だった。

8. 結び—コテージへの評価

ここまで、ディケンズのコテージ運営について論じてきて、コテージはディケンズとクーツの使命感と熱意、ヴィクトリア朝中期の人道主義、収容者の自助努力に重きを置いて道徳的覚醒を促す新しい素行矯正法が結びついた産物だということがわかる。ディケンズからクーツ宛の手紙、HWに掲載された彼のエッセイから浮かび上がるのは、受刑者管理のエキスパート顔負けに女性たちを教育、管理して、煩瑣な実務をこなす、最先端のセラピーを実践する実験家、有能かつ厳格な経営者としてのディケンズの一面である。コテージは家庭的に見える反面、巧妙な監視体制を取り入れた緊張を強いる空間でもあった。『ハード・タイムズ』と『互いの友』において、事実のみを重視する実利一辺倒のカリキュラムと断片的な知識の丸暗記のみが取りえの教員量産システムを批判的に描いたディケンズは、実生活では、一変して管理教育の権化と見まがうばかりである。ここに、よく指摘されるディケンズの二重人格的な側面を見ることができよう。

コテージの収容者は更生したものと脱落したものが1対1で、果たして成功だったのか失敗だったのか非常に曖昧である。だが、ディケンズが多忙なスケジュールをやりくりして、世間から白眼視されていた女性たちを立ち直らせることに継続的に取り組み、比較的短期間で目的を果たしたことは評価すべきである。精神論に傾いた説教や懲罰に訴えることなく、結婚と家庭生活をインセンティブにしたのは、ディケンズならではの深い読みである。ディケンズがコテージから手を引いたのは妻キャサリンとの別居とその後のスキャンダルが原因であって、熱意がなくなったわけでも、運営がうまくいかなかったわけでもない。ディケンズ退任後、クーツは別の人間にコテージ運営を委託したが、尻すぼみになり、1862年、コテージは閉鎖された。いかにディケンズの存在が大きかったかの証である。しかし、更生した女性と同数の失敗例があった理由は考える必要がある。

刑務所や類似の施設から事前説明と意思確認を経て、コテージに入所したにもかかわらず、目的を果たせなかった女性が続出したのは、入所前の選別、ス

タッフ、教育カリキュラム、収容者に複合的に問題があったからで、原因を特定することは不可能であるし、無意味でもある。しかしながら、すべての女性に、売春は悪徳であるから悔悟し、更生して女性本来の居場所である家庭に戻ってよき妻、母になれるようにはげむべきである、という中流階級の価値観を一律に教え込むことがそもそも無理だったのではないか。もちろん、売春は道徳面、法律面、社会面、人道面すべてにおいて容認できないし、するべきでない行為である。しかし、ディケンズを手こずらせた女性たちは、規律正しい擬似家庭生活になじまず、すぐ街に戻り、あまり罪悪感がなく昔の稼業を再開した。結局のところ、彼女たちには家庭の居間や暖炉のそばが合わなかったのではないだろうか。クーツと違い、ディケンズにはこのような現実が見えていた。それでも、彼の中流階級の道徳観に基づいた事業への意欲は変わらなかった。

ディケンズが、作家としてもっとも脂がのり切った時期に、貴重な時間を割いて、コテージ運営にこれほどまでにのめりこんだ原因は、売春婦更生の意義と自己の才覚へのゆるぎない自信であったろう。それに加えて、売春婦たちの持つ放縦さやしたたかさといったものに惹かれ、だからこそ彼女たちを管理、再教育することに熱中したのではないだろうか。ディケンズの人道主義は決して浅薄なセンチメンタリズムではなく、彼には管理教育のエキスパートとしての顔もあったことを忘れてはならない。

注

* 本論は、2007年6月9日、ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会において行った講演に加筆したものである。コメントと助言を下された方々にこの場を借りて感謝したい。

¹ Philip Collins, *Dickens and Crime* (1962; Bloomington: Indiana UP, 1968); Norris Pope, *Dickens and Charity* (New York: Columbia UP, 1978); Michael Slater, *Dickens and Women* (Stanford: Stanford UP, 1983); Pamela Janes, *Shepherd's Bush. . . The Dickens Connection* (London: Shepherd's Bush Local History Society, 1992).

² 主な説は次のとおりである: Edna Healey, 1838年; Collins, Janes, 1839年; John Forster, 1840年。

³ ディケンズ書簡からの引用は、Edgar Johnson, ed. *Letters from Charles Dickens to Angela Burdett-Coutts 1841-1865* (London: Cape, 1953) による。以下、文中または括弧内に年月日を記す。

⁴ 貧民学校は1818年にポーツマスの靴職人 John Pounds が貧しい子供たちを無料で教えたことに端を発する。1844年、シャフツベリー伯爵 (the 7th Earl of Shaftesbury) が貧民学校組合を創立して以来、イギリスに200以上貧民学校が設立され、クーツのような富裕層が財政支援をした。

⁵ Charles Dickens, "A Sleep to Startle Us," *'Gone Astray' and Other Papers from Household Words 1851-59*, ed. Michael Slater (London: Dent, 1998) 49-57.

- ⁶ Edna Healey, *Lady Unknown: The Life of Angela Burdett-Coutts* (London: Sedgwick, 1978) 118.
- ⁷ モラル・トリートメントについては次の文献による。Andrew T. Scull, “Moral Treatment Reconsidered: Some Sociological Comments on an Episode in the History of British Psychiatry,” *Psychological Medicine* 9 (1979): 421–28; Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture, 1830–1980* (1985; London: Virago, 1987) 30–33, 49; Akiko Takei, “Benevolence or Manipulation? The Treatment of Mr Dick,” *Dickensian* 101 (2005): 121–25, 128–30.
- ⁸ Collins 100.
- ⁹ Janes 10.
- ¹⁰ Isabella Beeton, *Mrs Beeton’s Book of Household Management*, Abridged Edition, (1861; Oxford: Oxford UP, 2000) 16.
- ¹¹ Charles Dickens, “Home for Homeless Women,” *Gone Astray and Other Papers from Household Words 1851–59*, ed. Michael Slater (London: Dent, 1998) 127–41.
- ¹² Healey 117.
- ¹³ マーク・システムについては、Collins, chs. 4, 7 による。
- ¹⁴ Dickens, “Home for,” 131.
- ¹⁵ Michel Foucault, *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, trans. Alan Sheridan (1977; Harmondsworth: Penguin, 1991) 227–28.
- ¹⁶ Dickens, “Home for,” 133.
- ¹⁷ Dickens, “Home for,” 135.
- ¹⁸ Charles Dickens, *David Copperfield*, ed. Trevor Blount (Harmondsworth: Penguin, 1986) 399.
- ¹⁹ Peter Ackroyd, *Dickens*, Abridged Edition (1990; London: Vintage, 2002) 295
- ²⁰ *OED* の ‘a fallen woman’ の定義は “one who has surrendered her chastity” である。日本語訳として通常使われる「堕ちた女」は不正確であるため、この論では ‘fallen woman’ という語を用いる。

ディケンズ・フェロウシップ日本支部規約

Agreements, Japan Branch of the Dickens Fellowship

制定 1970 年 11 月 12 日
 改正 2000 年 6 月 10 日
 改正 2005 年 12 月 1 日

第 I 章 総則

- 第 1 条 (名称) 本支部をディケンズ・フェロウシップ日本支部と称する。
- 第 2 条 (会員) 本支部は在ロンドンのディケンズ・フェロウシップ本部の規約に則り、日本に住み、チャールズ・ディケンズの人と作品を愛する人々を以って組織する。
- 第 3 条 (所在地) 本支部は支部事務局を原則として支部長の所属する研究機関に置く。
 (2) 支部事務局とは別に、財務事務局を、財務理事の所属する研究機関に置くことができる。
 (3) 本支部の所在地の詳細については付則に定める。

第 II 章 目的および事業

- 第 4 条 (目的) 本支部はディケンズ研究の推進とともに支部会員相互の交流・親睦をはかることを目的とする。
- 第 5 条 (事業) 本支部は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
 1. 全国大会および研究会の開催。
 2. 機関誌の発行。
 3. ロンドン本部および諸外国の各支部と連絡を密にして相互の理解と便宜をはかること。
 4. その他、本支部の目的を達成するために必要と認められる事業。

第 III 章 役員

- 第 6 条 (役員) 本支部に次の役員を置く。
 支部長 1 名, 副支部長 1 名, 監事 1 名, 財務理事 1 名, 理事 若干名。
- 第 7 条 (役員の職務) 支部長は理事会を構成し、支部の運営にあたる。
 (2) 副支部長は支部長を補佐する。
 (3) 監事は本支部の会計を監査し、理事会および総会に報告する。
 (4) 財務理事は、本支部の財務を管理する。
- 第 8 条 (役員の選出および任期) 役員の選出は、理事会の推薦に基づき、総会においてこれを選出する。
 (2) 役員の任期は 3 年とし、連続 2 期 6 年を越えて留任しない。
 (3) 財務理事の任期は支部長の在任期間とする。
 (4) 役員に事故がある場合は補充することができる。その場合、補充者の任期は前任者の残任期間とする。